

令和3年度 重点的に行った事業

センター名	中津川市地域包括支援センター
事業名	認知症みまもりのわSOSネットワーク事業 どこシル伝言板
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和3年4月1日現在、認知症の方(介護保険認定調査情報の日常生活自立度Ⅱ以上の方)は、市全体で2,993人。その中で64歳以下は45人、65歳以上の方は、2948人で、65歳以上の人口25,311人に占める割合は、11.6%となっている。</li> <li>・認知症の方のうち、「見守りの必要な認知症」の方(介護保険認定状況から、認知症日常生活自立度Ⅱ以上、かつ寝たきり度がJ、A、自立で運動機能が保たれている方)は1,734人。</li> <li>・この1,734人のうち、高齢世帯・独居世帯の方が1,028人であり、介護保険サービスと共に、地域の中で見守りを必要としている現状がある。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症の方は、出かけた際に行方不明となる危険性があり、事故や体調変化のおそれがある。また、独居、高齢世帯の場合は、出かけたことに周りが気づかず、通報や発見が遅れてしまうことがあり、通報が遅れることで、より危険が高まる。</li> <li>・認知症の症状がある高齢者等を介護する家族にとって、外出時の行方不明等による事故への不安が大きく、外出などの行動を抑制してしまうことがある。</li> <li>・高齢化が進むことで、今後も認知機能低下者は一定の増加が予測される。その中で、介護者も高齢化が進んでいること、家族形態の変化(独居・高齢世帯の増加)により、家族だけでは支えられなくなっている。</li> </ul>
目標 (目指す姿)	認知症になっても住み慣れた場所で安心して暮らし続けることができる地域
対象者(重点)	認知症の症状があつて、外出時に行方不明となるおそれがある方(希望者)
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見守り強化のための、どこシル伝言板を導入</li> <li>【どこシル伝言板とは】</li> <li>・普段身に着ける物にQRコードシールを貼付することで、見つけた方がスマートフォンでQRコードを読み取ると、即時に家族に連絡が行くシステムのため、早期の保護につながり家族の負担軽減と事故防止を図ることができる。また、衣服等に簡易に貼付が可能であり、本人に持たせる必要がなく活用しやすい。</li> <li>・そして個人情報は一切使用せず、必要な情報のやり取りすることができること、その場でのその方に対する対応方法を知ることができる。</li> <li>・どこシル伝言板の機能や活用方法について周知</li> <li>・各関係機関への周知(警察・消防署・居宅支援事業所、各地域包括・在宅介護支援センター、民生児童員役員会、区長会連合会)</li> <li>・一般市民への周知(広報、ホームページ、メール配信、北恵那バス掲示板、認知症サポーター養成講座・出前講座で周知の実施)</li> <li>・登録希望者の相談があれば訪問等で説明対応している。</li> </ul>
実績	<p>R3.6月 どこシル伝言板を開始 (導入前に関係機関に対し事前説明会を実施:居宅事業所・包括・在支・警察署・消防署)</p> <p>R4.2月末現在 どこシル伝言板の登録者は18人。 (認知症みまもりのわSOSネットワーク事業の登録者は延64人、個人賠償責任保険は延54人)</p> <p>* 実際の読み取り事案:QRコードが読み取られたが、家族が連絡に気づかず、利用者はそのまま帰宅。(普段の買い物でトラブル発生し、店員による読み取りであった。)状況の確認を家族とケアマネジャーに行いサービスの調整や今後の対応について話をしする。</p>

センター名	瀬戸の里地域包括支援センター
事業名	地域支援、相談と支援体制の充実強化
現状	・地縁や近隣との関係が厚く地域での関わり助け合いがある一方、複雑化や潜在化しているケース、高齢化による助け合いの行き詰まり、担い手不足の問題が増えている。
課題	・高齢者に関わる各関係機関の視点からの情報収集、その役割を活かした連携、地域住民が主体となる「見守り支えあいづくり」への働きかけの必要がある。 * コロナ禍におけるニーズ調査の結果 ①生活は出来ているが資源回収の中止によりゴミが溜まってしまう 不定期の不燃物を捨てにいけない ②各地区集まりの中止、外出および交流の減少 ③ファミリーサポートから送迎を断られる、担い手不足 ○○○
目標 (目指す姿)	・地域のネットワークが広がり、気軽に相談ができ、相談が繋がる。 ・住民が困り事を自覚し、地域で共に考え、見守り支え合える地域。
対象者(重点)	・潜在ニーズを抱えた高齢者 ・担い手となる高齢者と、高齢者に関わる関係者及び各団体
取り組み内容	(その1) 地域との関わりの中で実態調査と連携への呼びかけ ①地域活動の低下がみられる地区 ②高齢者団体の代表 ③高齢者が利用する店舗など (その2) 訪問対象の高齢者には、個々の生活課題と地域課題に向き合う意識作り、家庭や地域での役割の継続ができるような視点でのアセスメント、ニーズ調査を行う ①聞き取り+チェックリスト使用 ②アンケート調査(地区社協困りごと調査への協力) (その3) 月1回、第2層生活支援コーディネーターとの地域連携会議を持つ。 各々が把握したニーズの共有、地域の関係者ネットワーク作りへの土台とする ①聞き取り・アンケートから把握したニーズの整理 ②地域における必要な社会資源の把握 ③活性化へ向けた取り組みを検討し対応 ④住民への情報提供と啓発、相談窓口の周知活動を共に行う
実績	・地域の困り事を各関係団体と共有、各関係団体から更に、大規模な困り事収集への意識づくりへ繋がる。 ・地域の協力者へ資源回収の協力依頼と実施 ・集会場病院企業店舗へ「相談窓口」の啓発ポスターの掲示依頼、12か所以上 ・コロナ禍で予防教室自粛の代わりに地域包括支援センター出前講座8か所 ・60代から前期高齢者のボランティア協力者の発掘者5名 ・1月から地域の中心部で「歩いて立ち寄れる場所」苗木交流センターで新たな予防教室「学び繋がる集いの場」を月2回開催、担い手も地域のボランティア協力者へ依頼。今後、認知症カフェの会や、他関係団体とも「健康まつり」等、共同開催として活用していく土台ができた。

センター名	中津川市ひだまり苑地域包括支援センター
事業名	坂本地区介護者のつどい(「認知症介護者家族の会」)
現状	・坂本公民館にて年4回開催。昨年度より毎回テーマを決めて行っている。参加者は増えている。
課題	・コロナ禍により、感染状況によっては集まって開催すること難しい。会場の広さに合わせて参加人数も限定しているが、増加傾向にあり広く参加を募集することが難しくなっている。
目標 (目指す姿)	・介護をしている方々が、自分の気持ちを率直にお話しでき、他の参加者が共感するなかで、気持ちの共有とやわらかなつながりができる。
対象者(重点)	・介護をしている方。要介護者のある家族。これから介護することを心配をされている方。
取り組み内容	・毎回テーマを決めて、主催側も参加者と一緒に考える取り組みをしている。
実績	<p>本年度は2/24現在の時点でコロナ禍の影響もあり2回の開催にとどまる。新しい取り組みとしては、認知症の専門家としてグループホームの元管理者を招いて、参加者と一緒に考える会をもうけた。事前に聞きたいことなどをアンケートにとり、話し合いで交流を深めることができた。</p> <p>参加の案内等にお手紙を添えている。参加者の中にはお返事のお手紙で近況を知らせてくださる方もあった。</p> <p>参加希望の需要はあるため、実態把握訪問や、来所相談等で、必要度の高い方を優先しているが、広く募集することが難しくなっている。一度参加して下さった方が再参加して下さることが多い。介護に悩みや不安を感じる介護者の方の相談支援の場にもなっている。</p>

#### 令和3年度 年間予定

##### 第1回 「介護をされていて傷ついたこと」

～自分の中にため込んだ想いを打ち明けてみよう！～ (6/25開催済)

##### 第2回 「老いるということ」

～意外と知らないお年寄りの気持ち！～ (3/25開催予定)

##### 第3回 「認知症や介護について知りたいこと」

～認知症の専門家と一緒に考えてみよう～ (11/26開催済)

##### 第4回 「介護をされていて大切にしていること」

～大切にしている想いを他の参加者にも知ってもらおう！～ (開催中止)

センター名	ひだまり苑地域包括支援センター
事業名	70歳前半の独居男性の実態把握訪問
現状	・前期高齢者の割合が多い地区であり、近年70歳代の相談ケースが多くなっている。(相談内容は、病気の悪化や経済的困窮、孤独死など)
課題	・相談を受けるケースの中に事前に実態把握できない方があり、特に男性独居の方が多かった。
目標 (目指す姿)	・70歳から74歳の独居高齢者を対象に要援護者の早期発見とニーズ把握を行う。
対象者(重点)	・70歳から74歳の独居高齢者
取り組み内容	①訪問より把握できたニーズやケースの傾向をみる ②継続して実態把握 ③健康意識や疾病予防に関する声掛け
実績	対象者 57名 把握の方法 ①実態把握訪問を行う。 ②なかなか会えない人には包括のチラシを配布し高齢者訪問の趣旨と相談先を案内する。 対象者の傾向 区入り 44人 区無し 8人 転居 4人 死亡 2人 アパート暮らし 7人 介護保険認定者 7人(脳梗塞、がん、意欲低下、アルコール依存)
坂本地区の傾向	70代前半はまだまだ就労のある人が多い。また外出先のある人が多く訪問しても不在な人が多い。訪問14人 転出入も多い。 アパート入居者も区入りしている人が多く、公的な情報も入りやすい 車の保持者が多い 身よりのいない人や遠方にしか身寄りがいない人が多い。 食事が外食が主だった方が、畑作でつくる野菜を料理するようになった方がいた。 減塩に取り組んで健康を意識する人がいた。 閉じこもりがちで面談ができない人がいる。
今後に向けて	70歳代前半の方がたなので、就労者も多いと思われる。車を所持されており、生活活動範囲も広い。 地域開発に伴いアパート生活の人も増えており、身寄りのない方も少なくない。 SOSの発信先相談先を理解してもらおうとよいと思う。 車がある年代から参加の場に関心もて、必要なタイミングで参加できるよう発信ができるとよい。 介護予防だけでなく、生活が豊かになるよう包括だけでなく地区社協等の地域の団体と一緒に参加の場を考えていきたい。

センター名	中津川市ゆうらく苑地域包括支援センター
事業名	ネットワーク強化
現状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当地域内のケアマネジャーによる「けあまねカフェ」での連携</li> <li>・今年度より生活支援コーディネーターとの連携を開始。</li> <li>・地域の団体組織とのネットワーク作りが進んでいないのが現状。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域住民組織とのネットワーク作りが進んでいない。</li> <li>・4つの地域(落合地区、神坂地区【神坂・馬籠】、瀬戸区)を担当しているため、どの地域からはじめていこうかが課題であり、検討をしている段階。</li> </ul>
目標 (目指す姿)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に地域での暮らしの充実に向けて考え、取り組んでいけるネットワーク作り</li> </ul>
対象者(重点)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケアマネジャー、介護サービス事業所</li> <li>・生活支援コーディネーター</li> <li>・地域の各団体組織、地域住民など</li> </ul>
取り組み内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けあまねカフェ事業で、担当地域内のケアマネジャーと意見交流・勉強会 <ul style="list-style-type: none"> <li>☛ 地域課題から地域作りへの取り組み</li> </ul> </li> <li>・生活支援コーディネーター連携会議 <ul style="list-style-type: none"> <li>☛ ニーズの発見、課題解決に向けての取り組み</li> </ul> </li> <li>・地域の団体組織の情報収集、次年度地域包括ケアネットワーク準備期間</li> </ul>
実績	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けあまねカフェ事業 年間4回実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>☛ “地域課題”から“地域づくり”への取り組み。</li> <li>地域作りを協同で行っていく為、地域ケア個別会議で課題として出た「認知症と診断されても気軽に集まれる場所がない」の一つの手段として「認知症カフェ」について来年度は開催する方向で検討していくことになった。</li> </ul> </li> <li>・生活支援コーディネーター連携会議 6月から毎月開催 (コロナで中止した月あり)</li> <li>・地域の情報収集</li> </ul>

センター名	中津川市ゆうらく苑地域包括支援センター
事業名	ウィズコロナでの地域包括支援センター周知(PR)活動
現状	・地域包括支援センターについて、コロナ禍で周知活動ができていない。訪問や出前講座が思うようにできず、地域の中でも幅広い年代に周知ができていないのが現状。
課題	・回覧板や機関紙等で定期的な情報発信は行っているが、どこまで周知できているか不明。特に若い世代は、自分のことと捉えず、関心が低いため周知方法の工夫が必要ではないか。 ・ここ何年か新規訪問が思うようにできないため、70～75歳の今後相談が増えてくると考えられる年代への周知ができていない。
目標 (目指す姿)	・地域には高齢者の身近な相談窓口があることを周知することができる。 ・SNSを通じて年代に関係なく地域包括支援センターのPR活動を図る。
対象者(重点)	・70歳～75歳の新規独居世帯、及びどちらかが75歳以上の新規高齢世帯 ・若い世代への情報発信
取り組み内容	・70歳～75歳の新規独居、新規高齢世帯へのポスト投函による地域包括支援センターの周知及び情報提供 ・SNS(Instagram)での情報発信
実績	・ポスト投函へ訪問することで、敷地内に家族と生活しているのかどうかがわかる。 ・ポストに入っていた地域包括支援センターの資料を見て相談があった方が5名。 ・SNS(Instagram)は定期的な情報更新。市内の方がフォローしてくれているので、少しは周知につながっているのか。

令和3年度 重点的に行った事業

センター名	中津川市シクラメン地域包括支援センター
事業名	阿木地域包括支援ネットワーク会議(ごちゃませ会議)
現状	・生産年齢人口の減少等があり地区高齢化率が41.4%と高い。生活(支援)に関する相談等が増えている。
課題	・阿木地域包括支援ネットワーク会議(通称:ごちゃませ会議)を開始し5年が経過。高齢者の皆様の生活や健康の実態から様々な課題やニーズを把握できる様にする。
目標 (目指す姿)	・高齢者の皆様がいつまでも住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくりの推進。
対象者(重点)	・地域高齢者
取り組み内容	・阿木高齢者福祉アンケート調査(阿木地区内の65歳以上の方を対象にしたアンケート調査)
実績	(1)調査期間:令和3年8月～9月 (2)回答方法:①配布した調査票による回答、もしくは②スマートフォンを活用しQRコードの読み込みからによる回答の2通り。 (3)アンケート調査周知等:区長会、民生委員児童委員協議会等 (4)回答率:74.6% (5)主担当:中津川市シクラメン地域包括支援センター、NPO法人阿木ふるさと福祉村 (6)協力団体:老人クラブ、地区社協

センター名	中津川市北部地域包括支援センター
事業名	地域のネットワーク作り(強化)
現状	・コロナ禍で地域での集まりや各団体での事業が自粛され、地域との繋がり、関係機関との情報が共有しづらい。
課題	①コロナ禍でも繋がれる方法の検討 ②地域の情報収集・共有 ③ネットワーク作り
目標 (目指す姿)	・「新しい生活様式」を踏まえながら住民同士の繋がりをもてるよう支援するとともに、地域包括支援センターと地域住民や関係機関との関わり方、つながり方の多様化を図る。
対象者(重点)	・地域住民 関係機関
取り組み内容	・小地域で交流できる通いの場作り(第2層コーディネーターとの連携) ・リモート会議の活用(地域ケア個別会議・介護者のつどいなど) ・書面を活用しながらお互いのつながりを維持する。 ・地域包括ケアネットワーク会議の開催。
実績	<p>【課題①】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域ケア個別会議をリモートを利用し開催し、関係者と繋がり、支援に繋げることができた。</li> <li>・介護者の集いを書面開催で行い、介護者同士、包括との繋がり維持を図った。書面として残るため読み返すこともでき耳の遠い方でも交流を図ることができた。</li> <li>・関係機関とのケース検討や情報共有をリモートで開催。</li> <li>・実態把握訪問から休止が続いているサロンを再開してほしいという声を聞き、第2層コーディネーターに繋ぎサロンの再開にいたった。</li> </ul> <p>【課題②】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題を抱えるケアマネのケースに対して地域ケア会議を開催(近隣住民、地域の交番、消防署などの参加で新たなネットワーク、協力体制を構築することができた。)</li> <li>・連携会議に実施</li> </ul> <p>【課題③】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近な地域の集会所で介護予防教室を開催。第2層コーディネーターと連携することにより、地域福祉推進員に協力してもらい住民への周知や勧誘が行えた。</li> <li>・地域の通いの場の今後の在り方について第2層コーディネーターと関係機関で話し合い、今後、地域を巻き込んで検討していく。</li> <li>・ネットワーク会議の開催はできなかったが、事務局会議を重ね、本会議開催に向けての検討を行う。</li> <li>・第2層コーディネーターと連携し、老人クラブの広報で地域の高齢者に対して地域包括支援センターの周知を図った。</li> </ul>